

してその先は決定の厭世です、當座は死のふとま
 て思ひつめた、そして一層死ぬならその人を殺し
 て死のふと考へた事もございました、本當に私は今か
 ら考へればどーしてあんな考が出たらふかと、思ひま
 すわ」
 文子も道子も無言、二人とも眼からは涙がホロ／＼流
 れて居る。

「あ、私は實に罪深ふございました、こんな景色に對
 しては猶更悔悟の心が湧き出てますわ……」
 堪へ得じな此の想、文子はワツと泣き出した。
 「文子さん、懺悔すればその罪は消へると思ひますわ
 ね、そんなに御泣きなさらないで」
 道子のなまげある言の葉は文子には心の奥までしみ込
 む如く感じられるのである。
 「しきり吹きすさぶ風に枯れた木の葉がハラ／＼と二
 人の前に落ちた。
 文子は今更の如く親友の深切を感謝して道子の手をに
 ぎりしめるのである。

さんげ其ものは涙期されたほど深く詳しくない、此作の人を動かす
 のは却つて其場合と周囲の事と、友情などであらう(讀者評)

○ゆく雲 著代 服部水仙子

の僕だ、何するつと一言語り掛つた時はもう遅い羽ば
 たり強く雀は飛び上つて見る間に姿も見えなくなつて
 しまつた、さあ赫然となつては前後の見境も無く僕は
 生憎と傍に有つた手頃の石を握りより早く……消魂し
 い叫び聲に自分もはつと気がついた時は
 如何だろ……押へた両手の指の隙間か
 らポタ／＼と滴る赤黒い血……
 「三日間一ヶ月ばかり病んで、片目ば
 かり現してた眼帯を取り限けた時はもう
 ……見る影も無い不、不具者であつた！
 固く閉ぢた睫毛からホロ／＼と一滴頬に傳
 はつて、一文字に結んだ唇の顫かすか。
 「姉を不具者にした！の一言は如何に僕
 の胸を打つたか見るに忍びない姉の顔を
 如何したら避けられやうかと問ふに聞え
 た指句が明くる十四の春、翻然と村を去
 つて目ざすは昔にばかり聞えてた東京、
 丸二年と云ふものは紙屑も拾つて歩つた、ボーイにも
 なつた、或る時はまた博徒に養はれたこともあつた。イ
 ヤもう其後のことは語るまい、君が皆知つてる筈だ、
 裏庭に落葉掃き集める音高く、何處からか一葉、銀杏

子んも緒乙子王八(外資)きじさ



の葉が吹き入つた。
 「君、察しても呉れ給へ、決して醜い方ではなかつた
 姉は花の盛りを僕の爲めに散らされてから卅四歳の今
 猶、獨淋しく故郷の一間に閉ぢ籠つて居るのだ」
 「すまぬ、君、考へても見て呉れ、如何
 に強ひられたからと謂つて僕一人、美し
 い妻を得てそして楽しい夢に耽つて居る
 ことが出来やうか……雪江の真情はい
 つもながら、感謝して居る、決して／＼恩
 愛を受けることの出来ない僕の身にもな
 つて考へて呉れ給へ」
 「イヤ能く解つたよ！静に黙想の頭をあ
 げた菊地貞夫、彼の決死隊に其名も高き
 我友、海軍中佐戸山一雄に、妹雪江が切
 なる思を打聞けて、ひたすらに彼が平常
 の無妻主義を説くべく説いたのであつた
 が、姉に善理立つ一掃が決心に動かされて、解つたと
 こを謂ひさて戀に惚める妹を何としよう。
 悽然として腕を組める一雄の張りたる肩越しに、土堤
 の柳の纏れ合を、憎しと眺むる心に響く晚鳥一聲、空

「忘れもしない僕が十三の時だ」病なげに氣息ついて
 一雄は、吸ひさしの朝日を灰につき込んだ手を静に組
 んで幾平と眼を閉ぢた。
 「暴れ盛りのわけて家格の言はする我儘三昧、見るも
 の聞くもの自分の思ふ儘に振舞つて、若しも其意に逆
 ふ者があつたなら、それを片端から鐵拳を振り廻す
 と云ふ按排で……年の割には力も強かつた……僕
 目には大人とて恐ろしいものとは映らなかつた、女や
 子供だとして控目にはしなかつた、手下をそのかして
 芋茹を荒したこともあれば、毛虫を振って人の襟元へ
 投げ込む位は常のこと、あらゆる亂暴を逞しくして居
 たものであつたが或る日のことだ」
 「學校で例の亂暴をやつて、終に教師に隣室に起立を命
 ぜられたのを、逃げて歸つて勢よく裏門から飛び込
 で見ると、君、君には未だ話したことは無かつたが僕
 には一人の姉があるのだ、幽に眼を開いて客はと見れ
 ば、これも組んだ片腕は胸に、片手に美しき髪を弄び
 ながら靜に耳を傾けて居る。
 「其姉がそう嬌か其頃十八だつたと覺えて居る、其朝
 取る取らせぬの争ひの果、暴僕我を通して捕ひて置い
 た雀籠の、其戸を今開けやうと仕てるぢや無いか短氣

には頻りに行く雲の足はやし。
能く似た趣向はあつたやうに思ふ、必ずしも獨創の語ではない、只
行文の體、一字一句も思にしない作者の用意はいつも敬服に値ひす
る(讀者評)

めぐりあひ 名古屋市 楓 の 花

似てる、眞個に能く似てる、横顔だから明瞭とは解ら
ないけど、何うしても彼の人だ、彼の人に違いない、
何、違つてたところで、謝されば済む事、一寸聞いて
みやうと思つて。
「彼の貴女、若しか人違でしたら濟みませんが、貴女
は今木のお澄様じゃなくつて？」
私は思切つて斯ういつて、自分と差向に腰掛けて、片手
を窓に頬杖突いて、うつとりと外面を眺てる、嬌艶ば
い人の袖を引いてみました。
と彼方は驚いて此方を、振り返りましたが
「あら！ 貴女はお清様ね、厭だわ私、全然見違ちやつ
たんだもの……」と向直つて、
「先ア、暫くの間に、概う丁然奥様ね私本統に見違ち
まつてよ、でも丸鬢が宜く似合つて、善い奥様だわ、
熱に顔を観られて、私ははつと赤く成つて俯向て仕
舞ました。

雖然！ 變つた？ 變つたとは此方の云ふ事
洗髪を根の低い銀杏に東ねて、荒い辨慶稿の素袷に
博多と黒縹子との、晝夜帯を引掛に結んだ…… 是是が
お澄様とは…… 昔の儘の可愛い口許のほころが無かつ
たら、私は倒低お澄様と呼んでみる氣は出なかつたて
しやう。
お澄様は四五年前、琴の稽古で姉妹の如に仲好くした
私のお友達、客色好て精巧者で、音楽が達者で、中て
もバイオリンが一番得意でした。自分は女學校を卒業
したら音楽學校へ入學者望だつたのを、十八の春、
何ても材木屋とか、可成の財産家から縁談があつたの
で、両親が慾に目が眩れて、無理にお澄様を其方へ遣
る事にして丁つたのだそうです。
興入の其晩家を出る時、お澄様が唄の上から「お母さ
ん、私嫁つたつて真ぐ離れて来るんだから、荷物なん
か、悉皆よこさ無くつても可いよ」と言ひなすつたと
やら、彼慶花嫁さんは見た事が無いと、琴の師匠があ
きれて話してましたが、お澄様のあの氣性では、其慶
に心外だつたらうと、私は本統に氣の毒で堪りません
でした。
其機關も無く、私は此方へ嫁つたので、其からの事は

少しもさくませんでしたが、眞逆此慶に變つてみやう
とは…… 私は何とやら涙ぐまれて参りました。
「貴女何處まで？」
「エ、私？ 豊橋、概う此次なの、彼の貴方は矢張名古屋
屋の？」と聞きさすと

「オホ、彼慶家なんか、いつか出ちやつて
よ、何うせ私みたいなものは、何家へ嫁つ
たつて長持はありはしないわ」と蓮葉にい
つて、寂しい笑。
「其慶事はないけど、彼慶に希望てらした
目的が、不可なくなつたんだから誰だつて
ねう、本統に推察して。

「有難よ、雖然お清様、私は結句此方が氣
樂て可いと思つてるわ、生中何々女史なん
て、人に立られて究屈を思するよりも、仕
度儘の道樂商買で、旅から旅へ飛びあるい
てる方が、面白くつて、餘程私の性質に合
つてゐる、何うして暮したつて、一生だもの……」
投げるやうにいつて、抜いた銀管で、じれつたげに前
髪を掻きながら。
「お清さんには色々話したい事もあるんだけど……」

子信子金 群翠多南 (外賞) けかたわ



一寸小首傾て。
「吉本座てのは、確豊橋たつたわね、それじゃ私近い
中に行かぬ知れないわ、左様したら其折には、いづれ
また……」
嗚呼！ 吉本……、それではお澄さんは……
折から流笛が一聲ピツとなつて、流車は轟々
と豊橋驛に進入しました。
これも人の世の樂、丸鬢と、銀杏返しと、身の成行は變
つて行くけれど、昔なじみの顔おはんに、氣象を知らば
こそ、其人の哀な境遇にも同情する、汽車中であるだけ
人生行路の圓が一層あきらかにあらはれた(讀者評)

花紅葉 (上) 日本橋 小林 櫻花

麓の岡に耻かしく紅を粧ふ花紅葉、鳴く杜鹿
の妻戀ふる秋の中句、四疊半の書齋の机に倚
り掛りて二人語り合ふは鶴岡勝一と云ふ法科
大學生と妹の綾子である綾子は芳紀十六、流
行の東髪は何處となく氣高に見える「お兄様
今日は何處へも御出掛なさらなくつて？」急須に湯を
注ぎ乍ら兄を見上た「さうだね午後から五二會へても
行つて見やうかと思つてもゐるが」と煙草の灰を落し
ている「そう妾も今にお兄様の御嫁に……あの妾の姉